

ふにはさて、早夏氣持よき季節とは相成り
 申す。近頃、は情康とのおんふと、大慶にぞ
 んじし。
 近生事、ふの嶼に、冬まおり、ふたねの花
 に春をむかへ、若布刈る蟻婦をおもしろかり

をりしまに、その春もたちまち去りて、いち
 はやくも濱^豆の莢見る頃とはあり申す。實
 は、先月引きあぐるはづありし、一人居の
 味おぼえしは、すっかり、おふに根がえ
 りと人にわらはれぬぶとく、だんだん、屍
 おかくちりしへども、本月中には、必ず、瓦
 ちのくふとにさだめ居り申す。
 いつぞやは玉竹、は葛示、難有拜誦つかま
 たりし。

瞬間とはかくもたふといものであらふか云

せられし。

獨り居るは左にみゆりてはかきかき

7

獨り居るは左にみゆりてはかきかき

ははせて音を聴くぞたしのき

ふれはふの海驢島あしかいまにての拙首、掌門の人に

は喘はれしかしれど、とにかく、さひし

きもの、呼、だけは出てをるか、存じし。御叱

評んをされたくし。

十ノ廿 松屋製

(SM) C-1)

々、また、ほつかりと月が出た、夕露ふど
ふんともしへずおもしろく結構に拜見いたし
し。
そも寂靜と生動とは、二用するも、本體に
還りては一ふるべく、唯、寂靜を徹見しては
いめて生動の真義を透観いたすべく、芭蕉が
「憂き病をさひしからせよ閑古鳥」のぶとき、
たしかに寂靜中に生動を見しもの、
か。かやうお境はとかく西洋人には縁遠く
東洋の自分達お涯たがひに親しきものとどん

山村暮鳥様

いそはまには磯牛といふものをりトヤ。
海南うまづみのぶときものにてト。

いそしをみて
良寛禪師を冥想す

春の海いそしにのつて現じあつ

匠生事、いづれ來月にモいらば小用にては
近處までまぬるべく、その節は、自然拜晤を
えたくおもひをりト。

時下、折角、は自重され祈りト。

匠生は先月上京、治療後の反應にて、午後
はやや氣分衰え氣味ふりしも、昨今は又、大
分によろしくト。草々

五月二十日、鉦子あしか嶋にて

草々
銭
拝